

## II 祇園・円山

# 古都の深層

秘められた場の歴史

高木 博志

東京の銀座に匹敵する、明治初年の京都の文明開化の場といえ、円山であろう。明治5（1872）年に京都博覧会が入京を許された外国人たちは、円山周辺に宿泊した。明治前期、八坂神社の南正門前の中村楼と藤屋、山腹の安養寺の塔頭であった也阿弥、左阿弥、金閣を模した三層の楼閣の吉水温泉などが、料亭や西洋料理を供するホテルとなった。

また明治維新が創りだした「京都らしさ」の象徴として、円山のしだれ桜がある。円山のしだれ桜は、祇園社の執行であった宝寿院が廃されて、築地内の寺桜が、公園の中に一本、そびえ立つものとなった。円山に隣接する祇園では、

従来のお座敷での歌舞ではなく、欧米のレビューよろしく、舞台から座席の外国人観客に演じる「都をどり」が始まった。また良質な古美術品が、外国人に对面販売された骨董街が知恩院西側の門前にあるのも、円山・祇園のもつ国際性や開化性の立地によるものであった。

東京五輪の招致スピーチで、キヤスターの滝川クリステルさんは「おもてなし」を、日本の文化とアピールした。とりわけ京都の花街、祇園は「京都らしさ」と「も

## 観光と密接に関わった性

てなしの文化」の粹とされる。しかし京都の花街の歴史には、バラ色だけでは描けない、性の隠蔽があるだろう。溝口健二監督の『祇園の姉妹』(昭和11年)では、商売の傾いた木綿問屋の旦那が、梅村蓉子演じる芸妓・梅吉の世話になる。その茶屋が、円山に隣接する四条通北東部の祇園乙部(膳所裏)にあったことは、旦那の没落を象徴する。また明治期には、四条通の南側、現在の華やかな祇園甲部歌舞練場の付近には、定期的に梅毒検査をする駆籠院があった。

明治41(1908)年の京都市の統計書によると、祇園甲部(四条通南側、北側西部)の芸妓54



①円山公園のしだれ桜②外国人向けに披露された都をどりの明治時代の彩色写真(いずれも京都新聞出版センター刊・白幡洋三郎「幕末・維新 彩色の京都」から)

0人、娼妓91人に対して、祇園乙部(四条通北側東部)には芸妓64人、娼妓178人がいた。京都には、祇園をはじめ島原・宮川町・先斗町・上七軒・五番町・七条新地など、花街や遊廓が多くあり、それは観光とつながっていた。たとえば大正4(1915)年の大正大札の時には、観光ブームで京都の花街は遊客で賑わった。もっとも社会における性のあり方は歴史的に変化してきたし、「都をどり」や井上流の京舞に代表されるように、明治期以降、花街から発展した芸能や文化は重要だろう。しかし昭和31(1956)年の売春防止法制定以前には公娼制があり、性と観光も密接に関わっていた。祇園に代表される花街の「京都らしさ」と「もてなしの文化」も、多分に近代に創りだされたものであるし、牧歌的なイメージだけで歴史は語れない。

(京都大文学部研究所所長)